

四声通解に引く蒙古韻略について

中村雅之

1. はじめに

表音式の文字によって漢語音を体系的に記したのものとしては、13世紀モンゴル統治下のパスパ文字が最も早いと言ってよい。もちろんそれ以前にも、チベット文字やウイグル文字などによって表音的に漢語を記した例はあるが、それらはそれぞれ個別に何らかの習慣にのっとって（あるいは筆記者の判断で）表記したものであって、漢語音を体系的にとらえたものとは見なし難い。

パスパ字漢語の資料としては、各種碑文、『蒙古字韻』、『事林広記』所載「百家姓蒙古文」（通称パスパ字百家姓）などがよく知られている。これらの資料に見られるパスパ字の漢語表記は非常に均質的で、誤写や誤刻の問題を別にすれば、基本的な表記法の違いはないと言ってよい。種々の資料における表記が均質的だということは、それらの規範になった資料が存在したということを意味する。そして、現存する資料の中では、そのような資格をもったものとして『蒙古字韻』がある。この資料は韻書の形式を借りて体系的にパスパ字漢語の表記を示したものである。したがって、他資料のパスパ字漢語表記も『蒙古字韻』のような書を用いて記されたと考えれば、均質的な表記が現れることも説明がつく。というより、それ以外にパスパ字漢語表記の均質性を説明する方法はないであろう。したがって、パスパ字漢語研究は『蒙古字韻』研究にほかならないと言える。

『蒙古字韻』が漢語音韻史研究にとって重要なものであることは以上の通り明らかであるが、実際にはその『蒙古字韻』自体がどのように成立したのか、さらにそのパスパ字表記がどのような性格のものであるのかという基本的なことさえも、いまだ全面的な解明には至っていない。それにはいくつかの理由がある。第一に、今に伝わるテキストが一本のみであり類似の書が現存しないこと。第二に、この書の成立に関する他書の記述がないこと。そして第三に、唯一のテキストである大英図書館所蔵本には欠落と多くの誤写があることである。本稿は、『蒙古字韻』成立の状況解明に少しでも近づくために、朝鮮の韻書『四声通解』に引かれる『蒙古韻略』なる資料について検討を加えるものである。

2. 『四声通解』について

崔世珍撰。1517年序。数種の版本がある。最も手軽なのは『原本影印韓国古典叢書（復元版）諺解・訳語類』（ソウル、大提閣、1974）所収本である。漢字音をハングルで表記しており、頻繁に引用する『蒙古韻略』も、そのパスパ字をハングルに変換して表記している。引用に際しては『蒙古韻略』を「蒙韻」と略記することが多い。

3. 『蒙古韻略』に関する記述

- a. 「蒙古韻略、元朝所撰也。胡元入主中国、乃以国字翻漢字之音、作韻書、以教国人者也。」（四声通解凡例）
- b. 「入声諸韻終声、今南音傷於太迫、北音流於緩弛。蒙古韻亦因北音、故不用終声。」
（四声通解卷末に載せる四声通攷凡例）
- c. 「唇輕声非敷二母之字、本韻及蒙古韻混而一之。且中国時音亦無別。」（同上）
- d. 「吳音角次濁音、即雅音羽次濁音。故吳音疑母字、有入蒙古韻喻母者。」
（古今韻会举要凡例）
- e. 「吳音牙字、角次濁音。雅音牙字、羽次濁音。故蒙古韻略凡疑母字皆有入喻母。」

(古今韻會舉要「牙」字注)

f. 「蒙古韻内蕭爻尤等、平上去三声各韻及葉韻、皆用w為終声。」

(通解所載翻譯老乞大朴通事凡例)

4. 先行研究

兪昌均(1973)：『較定蒙古韻略』台北、成文出版社。

兪昌均(1974)：『蒙古韻略と四声通攷の研究』ソウル、蜚雪出版社。

前者は四声通解に引く『蒙古韻略』を、ハングル表記(パスパ字形ではなく)のままに示した、一種の復元本であるが、安心して利用できるものとは言い難い。まず第一に『四声通解』に「蒙韻」と明記している以外の箇所もすべて拾っている。つまり、あえて「蒙韻」と記さなかったのは『四声通解』の標出音と同じであるからだとの解釈に立ち、全体系を“復元”したもの。そのため、『四声通解』で実際に「蒙韻」を引用した箇所が特定できない。第二に、引用に多くの誤り(あるいは改竄)がある。「摩me」をなぜかmoとするなど。

5. 『蒙古字韻』との一致と相違 (ハングルは河野式、パスパ字は服部式の転写による。)

5-1 「夢/謀/目」が微母(一致)

蒙古韻略：夢wung/謀wuw/目wu

蒙古字韻：夢wuj/謀wuw(k'uwと誤写)/目wu

cf. 「蒙古韻音入微母」(古今韻會舉要、平声「蒼」字および去声「夢」字注)

5-2 喻母3等をŋ-で表記(一致)

蒙古韻略：尤有右ngiw

蒙古字韻：尤有右ŋiw

5-3 「品」が-m韻尾(一致)

蒙古韻略：品pim

蒙古字韻：品p'im

cf. 中原音韻では真文韻(-n)に属する。

5-4 「o/ũo」の対応(相違)

蒙古韻略：(歌go)/葛goe/括goe/朶due/拔bboe/摩me

蒙古字韻：歌go/葛go/括gũo/朶dũo/拔pũo/摩mũo

5-5 蒙古韻略は声調ごとに分かれていた？(相違)

遠藤光暁(1994)122頁にいう。

魚語御韻来母の条(上35a)には「自此至日母平去二声失蒙音。」とあり、崔世珍の参照した『蒙古韻略』ではこの箇所が欠落していたことが知られる。ただし平声と去声のパスパ字注音がない、ということは上声にはあった、ということになり、『蒙古韻略』の体例は『蒙古字韻』とは異なり各声調毎にパスパ字注音が表示されていたのかもしれない。

これに関連して、『四声通解』「模姥暮」韻の明母の条(上38b)にいう。

臣謹按、「母姆某畝」四字、古韻皆收入有韻。今俗呼皆從姥韻。『蒙韻』雖収有韻、而音与姥同。

また、「真軫震質」韻の幫母「稟」字および滂母「品」字の注(ともに上57a)にいう。

『蒙韻』及古韻皆收入寢韻。

これらのように上声や去声の韻目が明示されているのは、『蒙古韻略』において既にそれらの韻目が明記されていたからだと考えるのが自然である。つまり、『蒙古字韻』では平声の韻目のもとに全声調を収めているが、『蒙古韻略』ではそのようではなく、各声調ごとに韻目が見出しとして掲げてあった可能性が高い。

さらに、以下のように『蒙古字韻』のパスパ字では区別がないにもかかわらず、『四声通解』所引の「蒙韻」では声調によって表記が異なる例がある。

蒙古字韻の「dūo」に対して、上声「due」、入声「doe」

蒙古字韻の「t'ūo」に対して、平声「toe」、上声「tue」

蒙古字韻の「tūo」に対して、上声「ddoe」、去声「ddue」

蒙古字韻の「lūo」に対して、平声「rue」、上去入声「roe」

これらのように、声調によって表記に揺れがあることは、『蒙古韻略』のパスパ字が各声調ごとに記されていないと起りにくいであろう。（その際、声調によってパスパ字表記が異なっていたかどうかは、ここでの議論には直接かかわらない。）

以上から、『蒙古韻略』は現存の『蒙古字韻』とは異なり、まず四声に分かたれ、それぞれの声調ごとに韻目とパスパ字表記を記したものと推測される。四声に分かつ方式が、伝統的な韻書のように巻ごとに声調を独立させたものか、あるいは韻図のように各声調を並列したものかについては、材料不足のため何とも言えない。ただし、上述の「自此至日母平去二声失蒙音」が仮に破損による欠落を意味するものであるならば、伝統的な韻書の形式であった可能性は低いであろう。平声魚韻と去声御韻で全く同じ箇所破損が生じているのであるから。

6. 『蒙古字韻』のパスパ字校訂

6-1 「行刑幸」：『蒙古字韻』では「heip」、服部（1946）は「hiip」と校訂する。

『四声通解』所引「蒙韻」では「hhiing」であり、碑文や百家姓でも多く「hiip」と見えるので、服部氏の校訂は妥当である。兪昌均（1973）のこの箇所のハングル表記再構形が「hhieing」であるのは理解できない。

6-2 「肩／傾／瓊／雄熊」：『蒙古字韻』では「-eup」、服部氏の校訂では「-iup」。

碑文や百家姓には「熊heup」以外に用例がほとんどない。『蒙古字韻』の体例上「-eup」とは異なる韻形が期待される。服部（1946）69頁注10にいう。

eup韻とiup韻とは蒙古字韻では同形になって居り、他の八思巴字文献にも書きわけた例がないが 四声通解でjupとjopで区別してあるのを一挙として校訂した。[-jupと-jopは、河野式ではそれぞれ-iungと-iongになる――引用者]

これ以上の説明はなく、ハングル表記の「-iong」によってなぜパスパ字「-iup」が導き出されるのかが問題となる。しかし、以下の理由によって、服部氏の校訂を支持したい。

第一に、『蒙古字韻』においては、「-i-」が期待される箇所にしばしば「-e-」が記される。上記の「6-1」を参照。第二に、他の韻に次のような平行例が見られる。

蒙古字韻： 「輝徽heue」――「規季geue」

碑文・百家姓：（用例なし）――「規季giue」

通解所引蒙韻：「輝徽hiui」――「規季gioi」

碑文と百家姓の「-iue」が注目される。「蒙韻」において、「-iui」と「-ioi」の関係が「-iung」と「-iong」の関係に等しいならば、「-iong」に対応するパスパ字としては服部氏の校訂通り、「-iup」がふさわしいと言える。

6-3 「兄」：『蒙古字韻』では「heip」、服部氏の校訂では「hūip」。

通解所引蒙韻は「hiueing」。これも次のような平行例があり、服部氏の校訂は妥当である。

「贊」：蒙古字韻「'ūin」、蒙韻「'iuein」

「雲」：蒙古字韻「'ūin」、蒙韻「'iuein」

6-4 「歆」：蒙古字韻「heim」、服部氏は「hīim」とする。

これは服部氏の校訂に問題がある。通解所引蒙韻は「hieim」とあり、パスパ字表記は蒙古字韻にある通り「heim」であったと見なしてよい。以下を参照せよ。

「欣」：蒙古字韻「hein」、蒙韻「hiein」

「休」：蒙古字韻「heiw」、蒙韻「hieiw」

蒙古字韻では「歆heim」の「-e-」の部分がやや丸みを帯びており、読みようによっては「-i-」と読めるような字形であるため、服部氏は誤って「hiim」と読んだものであろう。なお一般に、韻尾を有する3等韻開口曉母のパスパ字表記は「hi-」ではなく、「hei-」となる。したがって、「歆」を「heim」とすることは通例に反しない。

7. 校正字様の「各本」との対照

現行の『蒙古字韻』では、本文の前に巻首の序に続いて「校正字様」と称するものがある。これはそれ以前の『蒙古字韻』系の各テキストのパスパ字の字形を正したものである。その最初の部分に「各本通誤字」と称して、それまでの『蒙古字韻』のすべてのテキストで「誤っている」と校正者が見なした字形が挙げてある。

以下の左が「誤った」字形、右が校正された字形とそのコメントである。

「tʂeun」	「zeun」 順从禪母作「z」
「'hiw」	「ɣhiw」 藕从疑作「ɣ」
「p'hiɣ」	「bhiɣ」 侷从幫作「b」
「bhiɣ」	「phiɣ」 弼从並作「p」
「mün (*msn)」	「ben」 搵从幫
「zeɣ」	「j(a)ɣ」 痒从喻

『四声通解』において「蒙韻」の表記が確認できるものは、「順 jjiun」「侷 pyng」「弼 pyng」である。前二者は校正字様の「各本」のパスパ字形に相当するものと見てよい。「弼 pyng」も校正字様の「各本」の「bhiɣ」が「p'hiɣ」の誤記であるならば（弼を幫母とする資料はないから）、やはり「各本」のパスパ字形に相当する。さらに『古今韻会举要』「偶」字注に「蒙古韻入影母」とあるのも、校正字様「藕」字の「各本」に同じである。つまり『蒙古字韻』の校正者が用いた各テキストは『蒙古韻略』に非常に近いものであったと言える。

8. まとめ

『蒙古韻略』はパスパ字によって漢字音を表記した資料であり、『蒙古字韻』と非常に近い関係にあるが、その体例はやや異なり、声調ごとに韻目とパスパ字が記されていたと想像される。その表記は現行の『蒙古字韻』が校正の対象とした諸テキストと多くの共通点を持っており、『蒙古字韻』成立の状況を知る上で多くの示唆を与えてくれる。

<文献>

- 遠藤光暁(1994)「『四声通解』の所拠資料と編纂過程」(青山学院大学「論集」第35号)
河野六郎(1947)「朝鮮語ノ羅馬字転字案」(Toyogo Kenkyu, 2. 河野六郎著作集1所収)
服部四郎(1946)『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』文求堂。